

今年も残すところ、3ヶ月ほどとなりました。4月からの今年度も、今週からは下半期です。教会形成の4年目、アシュラムの五本柱の「献身」を掲げて歩んできた2024年ですが、振り返ってみて、いかがでしょうか。恵みの証しはあるでしょうか。

悪魔の仕業

いよいよ、今朝の22章からは主イエスの受難物語が始まります。365日に青空やそよ風だけでなく、台風や吹雪があるように、私たちの人生にも、四季があり、目の前が真っ暗になるような時期も通らされます。イエス様のご生涯の中にも、幾たびか、悪魔の仕業がありました。洗礼を受けた後の荒野の試練、そして、この受難と十字架刑へのヴィア・ドロローサ（苦難の道）です。

私たちに語られている第一のことは、「目を覚ましていなさい」という神の警告です。「殺す」「引き渡す」「狙っている」恐ろしい言葉が続き、どこか現実離れした話の展開に感じます。しかしこの言葉が、最もありえないイエス様という救い主に向けられたということを思うとき、私たちこそ、サタンに狙われる、引き渡される可能性が十分にあることを、注意しなければなりません。

自転車事故啓発ポスターの言葉を思い出します。「『私に限ってありえへん』その感覚が、ありえへん」です。「魔がさす」という言葉があるように、私たちにとって、悪魔の仕業は身近な問題です。避けられない災いに対して、うろたえてはなりません。その囁きは、1度だけとも限りません。

悪魔は、決して愚かな存在ではなく、私たちよりもうわ手です。ですから、謙虚になって、主により頼みましょう。これが実は、私たちのできる最高の作戦です。

自らを振り返って

「逢魔ヶ時」という言葉は、暗闇が迫る夕方のことですが、魔物に出会う、災いの時という意味もあるそうです。誰一人、災いを望む人はいませんが、ただその事を嘆き、人にすがるばかりでは、「黄昏泣き」をする赤ちゃんと同じです。

主の受難は、ユダヤの過越祭の時でした。これは出エジプトのモーセの故事に由来する、先祖の苦難と救済を思い起こさせる祭りです。ファラオと、モーセの戦いは、実に10回にも及びました。救済には、大きな犠牲と、長い時間がかかったのです。しかし、彼らが神に与えられた喜びは、人々が奇跡と呼ぶ、驚くばかりの恵みでした。その恵みに勝る救いが、主イエスの罪の贖いなのです。

人生の暗闇に「なぜだ！」と嘆く時、そこに答えは見出せません。しかし、その闇に自らのあり方を映して「何のためだろう」と振り返って問うとき、私たちは、悔い改めと、神のゆるしと愛が、与えられているという祝福に辿り着くことができます。

「タベになっても光がある」（ゼカリヤ 14:7）と聖書は、約束しています。